

巨人大鵬たまご焼き

蛙屋 無二齋

今年初め1月20日、立稽古と言っても、私の場合はオペラの舞台であったが、それで絞られて帰ったところに、「大鵬死去」のニュースが流れていた。「あゝ、あの大鵬も遂に逝ったか」というのが、最初の感慨であった。私より三つ年上であるから、彼の全盛期は私の青春まつた中でもあったのだ。彼の強さには敬服していた。当時は柏鵬時代と言われたが、実質的には大鵬時代であったことは、多くの人が知るところである。その時詠んだ追悼の短歌である。

大鵬死す立稽古より帰宅して真つ先に聞くニュースの衝撃

巨星墜つ巨人大鵬たまご焼き我が青春の五六ページよ

巨星墜つ巨人大鵬たまご焼き巨人の名だけ余計だったね

しかし、三首目にあるように、当時の流行語でもあった、「巨人大鵬たまご焼き」という言葉には、少なからず反感というか不快感を持っていた。それは当時詠んでいた次の短歌に集約されている。

ジャイアンツ負けたる時は殊更に子等を煽りてアンチ育成

なぜこういう歌を詠んだかという点、まだテレビもなかった子供時代、西鉄ライオンズファンの私と熱烈な巨人ファンの弟との対立があった。良く実りの無い口喧嘩をしたが、弟の執拗な口（・）撃には正直辟易していた。家庭内でのこうした対立を私は好まなかった。その後、勤めた会社の同僚にも極端な巨人ファンが二人いて、前日巨人が勝った時は機嫌がいいが、負けると物言いいも乱暴になるし、巨人の悪口でも言おうものなら、殴りかかりのような態度まで取る者がいた。まるで、自分が巨人であるかのような雰囲気、私はそういう奴が大嫌いであった。ただ、日本シリーズを九連覇した当時の王や長嶋を軸とした巨人の強さに文句を言うつもりはさらさらなく、ONの実力や人格は尊敬こそすれ、何の不

満を持つものではなかった。要するに、「巨人は球界の盟主である」とかいう球団やそれを我が物のように言う巨人ファンが大嫌いであったのだ。言ってみれば、「アンチ巨人ファン」だったか。

そうしたことから、私は自分の家庭の中にまで巨人ファンを持ちたくなかった。当時のテレビのプロ野球中継と言えば、時折のNHKを除いては、否応なしに巨人戦だけであった。それがまた嫌で嫌でたまらなかつたが、それしか見られないので、仕方なく相手チームを必死に応援していた。時には、「巨人なんか130試合（当時の年間試合数）全部負けてもいいんだ」などと言うものだから、傍観者である妻は、そんな私に、「あなたの方がよほど偏屈じゃないの」とよく言っていたものだ。しかし、努力？の甲斐があつて、長女と長男は巨人ファンにはならなかつた。

人が有名人や団体のファンになるとするのは、その人が物心付いた頃や興味を持ち始めた時に活躍をしていた人に決まることが多い。私の場合は、野球では中西太、西鉄ライオンズ、相撲では吉葉山であつた。そして、当時ラジオで野球や大相撲の実況放送をしていたNHKの志村正順アナウンサーに憧れ、将来はスポーツアナウンサーになりたいと思つた程である。そういう意味では、弟の場合は少し遅れてONや巨人、北の湖がそうであつたのだ。ONを中心とした巨人の九連覇時代、テレビでは巨人戦しか放送がないでは、巨人ファンが多くなつたのは仕方がないことである。しかし、多くの巨人ファンの始末の悪さは、あたかも自分がその主役であるか、立役者であるかのように振舞つたことであると思う。ましてや巨人関係者やマスコミなどが、「アンチ巨人」と巨人ファン以外をひと括りで定義づけて呼ぶようになったことには、反吐が出る思いであつた。「俺は西鉄（後に西武）ファンだ」と。本来のファンというのはそういうものだ。

ついでながら、近年の大相撲で度々厳しく言われることに、立ち合いの際に、「土俵に手を付け」ということがある。力士が手を付かない場合には行司が止めることもある。ところが、栃若時代や柏嶋時代の立ち合いを見ると、土俵に手を付くどころか三十センチからひどい時には五十センチほども上のままで立っている。考えて見れば、そういう立ち合いをしていた人達が、親方になり審判員になり協会のお偉方になって、弟子や後輩に対して厳しい指導をしている姿は滑稽と言えば滑稽であるし、ある意味では理不尽と言えるもの

であると思う。

こういう問題は他にもあった。それは、弟子を扱くという名目での過度な体罰、つまり、暴力による虐待での死亡事件（事故ではない）などである。柔道界では女子選手への強姦で金メダルを剥奪されたり、行き過ぎた暴力行為で監督や強化委員などが更迭されたりする騒ぎになっている。最近では学校でも体罰という過度な扱きや虐待で自殺が頻発している。多くは今更の問題でもないのだろうと思うが、だからと言って放っておける問題でもない。

こうしたことを考えている内に、とんでもないニュースが飛び込んで来た。安部総理大臣が長嶋茂雄、松井秀喜両氏に国民栄誉賞を与えることを明らかにしたのである。先の大鵬（故納谷幸喜氏）の同賞授与発表の際には何の違和感もなかったし、むしろ、死去する前に上げるべき人だったろうと、いつもながら後手に回る受賞者の選定に腹が立ったほどであった。しかし、今度は違う。長嶋はいい。ある意味功成り名遂げた人であるから、お元気な内に本人に受けて貰うことが妥当であると思う。むしろ遅きに失している。しかし、松井の場合はどうか？ その気持ちは、

松井氏に国民栄誉賞？？？？？

と詠んだ川柳に集約される。多くのメディアの中にもそういう批評が見られる。両氏はともいい師弟関係だなどと、凡そ授賞理由と関係のないことをセットにするなど、意図的な無理な押し込みであることが見え見えである。そもそも、今時点で表彰するに値する功績があったと言えるのか？ 選定基準は次のようである。

『国民栄誉賞は栄典とは異なるが、内閣総理大臣表彰の一つである。「広く国民に敬愛され、社会に明るい希望を与えることに顕著な業績があった方に対して、その栄誉を讃えることを目的」としている。』

メディアによつては、参議院選挙を控えた安部政権の人気取りの道具に使ったとかの勘繰りをしているものもあるが、私は巨人というチームを引っ張る人で、政界にも影響力を持つと聞く人の無理な押し込みがあったのではないかと勘繰りたくなる。

ケチを付ければ切りがないが、安部総理が上げた松井のアメリカでのMVPとは、ワールドシリーズでのことであるが、これはどちらかと言えば線香花火的なものであり、MLBを通しての活躍度は並のレベルでしかない。全体としては、期待を遥かに裏切った方であろう。松井がアメリカに渡った当時、こんな川柳を詠んでいる。

松井さんメジャーに行けば応援よ

「巨人を抜ければ、西武ファンの私（アンチ巨人ではない）でも、あなたを応援しますよ、頑張ってください」との意味である。

松井に比べれば、MLB挑戦の開拓者であり、トルネード旋風を巻き越し、二度のノーヒットノーランなどを達成したMr. Kこと野茂英雄の方が、ずっと国民栄誉賞に相応しい。どちらかと言えば弱小球団においてメディアも余り騒がなかったとはいえ、三冠王を三度も達成している落合博満など、先に受賞してもおかしくない人達がいる。そんなことの検討比較を安部総理はしたのであるうか。それとも総理も単なる、「巨人大鵬たまごやき」に過ぎなかったのか？ 大鵬の表彰を機に、「これは長嶋もしないといけない。そうだ、これに松井もくつつけちゃえ」程度の発想に基づく選定であったのなら、誠に情けない。プロ野球界では、既受賞者が王と衣笠である。元盗塁王の故福本の場合は遺族が辞退し、イチローの場合は二度も辞退している。松井は辞退など考えていないようであるが、なんともしつくりこない選定劇ではある。お得意のアベノミクスならぬアベノミックスなど見たくもない。少し愚痴が過ぎたかなと思つたが、直近の電話で元上司と意気投合した。新聞やインターネット、週刊誌などでも結構同じ考えのある人が多いと知って安堵した。

今の時代、これは有り難いということは余りないが、BSやCSといった放送のチャンネルが多くなって、日本のプロ野球の全試合はもちろん、MLBの試合も多くがリアルタイムで観戦出来ることがある。何が有り難いと言えば、選択の自由があるということである。観る自由もあるが観ない自由もある。巨人の試合は観まいと思えば観ないで済む。

先日は、生涯に一度出会えるかどうか分からない、ダルビッシュの完全試合なるかという試合を最初からつぶさに観ていた。あれよあれよという間に九回が訪れた。期待の高まる中を2アウトまでスムーズに行った。最後は九番打者である。「これは行くな」と思った

瞬間、打球はダルビッシュの股間を抜けてセンターへと転がった。その時のダルビッシュの苦笑いが何とも言えなかった。ダルビッシュはアメリカに渡った時に、「世界一のピッチャーを目指す」と言った。正にそのような活躍をして、文句のない国民栄誉賞を受賞して貰いたいものである。

股間抜き球は転々センターへ一瞬にして飛ぶ。パーフェクト

あゝ無情だった一人の難しさ。パーフェクト劇時に終わる